明治卅七年一月

雅三俗古録

四

特別
イ4
1919
173

176450

○高山彦九郎遺著「若葉の草」と
題する小冊子を出したが、これを少人の小冊のいまだ
書物として出版するに至らざる分を蒐めたるもの
山人う為等の為めに自ら編したるものに
ある、故を雅談の為めに金の名を入つてゐる
記事の私録と、少人が著述を載つた年代を
さぐり問題来たのち、少人う春山自ら編
したと云ふこと、○論説を立てたあるもの
中の「若葉の挿画」のあるが落ち、少人の友人
う書いたものに何れも死の関係したと言ひ

38- 8972

[illegible]山人の注文したのうち多くうらう、毎夜
の軒廊にて針葉を鍵破ゑ[illegible]根
をとりにくるを虫蛙をおうむせ葉端にくるは
滴々露の垂つてゐる然を現はしたのを
[illegible]こゝに云い表したひある又表面
鳥の影を蔭墨に出しを[illegible]の
影の中に[illegible]と能やバッタ」を描
えぬとあるが、こんな[illegible]あるこゝに山人云
はの高価をもて珍重するの値うあると
思ふ、此のわいの命を山人花月や[illegible]に出版
まもなく、鶯脇の[illegible]一二

冊数をかう出来たのを脱元亭山人をと
ゆくゆゆゑんを山人の金前を供くに仕集
ひあるこゝの命中にこゝ小品をこゝにこゝ
故味のあるこゝにこゝ多くあい、八こ一二を拾
ちんぬ、たゞの命のごとくきこゝに山人の落魂性格
をもてこゝに拾あそ母屋元の材料ひある

[illegible]

私の[illegible]ひとのは鉛筆ひきいに端むと、去
るの帝琴と、三十目くらゐの茶を湯冷を
して淹れたのと、水甘の柿まひ卸しにの
と、ゐる数帽ふと、壁[illegible]と、九州[illegible]と、歌

文と毛筆と、軟いのと、大きな団扇と、赤青紫
と、田舎と、新聞紙の長いのと、下等の白く長
いのと、水のみ茶碗ハシカチーフと、芝居の土間
と、流行と、乗るのと、風の吹く
の流れたのと、口笛を吹くと、
のと、喧嘩をする顔と、旅行を病むのと、紙屋
の墓前の吸口と、長い金鎖と、小さな
紙入と、勝惚しと、お供と、石碑を建てる奴と、陶
器の銅版彫刻と、墨の涙いのと、魅の角と、
不熟心と、焼の時いのと、月琴と、兵士の
勝つたのと、不潔男振りと、爪の生くたのと、羅
馬字綴と、復讐の蠢動するのと、俳句と炭火

東京原製

のくさいのと、冬瓜の煮たのと、前髪の長い後
ろと、手紙をまくること、新出来の九谷焼と、
茶碗の湯と、内風呂と、甘い葡萄酒と、生き
と清朝体の活字と流の長い人と……
端歌をうたふ少女がめくる手紙をのぞいや

その一例を

はうた

うしろ影
夏はまくしき山の千の
青葉がくれに咲る
あんあの琴のゆかしさに
えし横顔は

おいそんよ
もしえとらぐとおもふ
何をくおお出う拾らしや
いきろ浴衣の
うしろ姿

猟銃

銃猟とすう面白いは面白いが手元人で
そそのそそと降参しまする故、ドウデエの
メアメリン、オフ、メラスコンを見ると那地の
も拂底とえそそ、銃猟者う郎おの集え

東樓原製

面々の帽子を投げ出し女を抱えて笑ちと云ふ
び降の出来のやうなる事に慣るを笑つ
てゐるのが天狗党としてゐるが、道理で
すよ、此の辺の百姓族さんは好者が有と
きして私毎々出えるのを見て笑けまする、
後者の五人も引具して銃の三挺もおせて
いつもやはり此の停車場へ出て来ゐる
を見ると、鵯が二羽と三羽とふ獲
おび弗一日へ行くるとおゆるでしたが
人うを殺四うのでしたが、其所をうしいを
連れいが、蓋し面うを能従ひ、私をへ

日時の流れを淵くのでしたが、何為と有仰い
ましたが、なにしろ之は甚しいのが有つ
たもので、なにしろ大いに熱心
可成の事でありまして、馬鹿な事は
流石に出ませんが、十五六位うと生捕つたを
籠の中に入れて来たのでしたが、元来は其を
して出ませんで獲物はうまく庭に出ますが、
既に庭の金魚きらいやあります。
最一番可笑うございますのは、昨日
脱け穴いたのが、町へ出て丸鶴を買つて
之を籠の中に入れて又一漁しましたが例の一羽

を獲ました。鋭気を沮喪するの
ですが、直に仲間を呼び、網の中の何
ですと、内へ入ると仲間が、三
那抜ぶ為と称して、お方の
ちゃうの大猫は甚麼奴だ！いも
しいが三匹、はあいでせう、なにしろ
ちゃうの鋭い猫を両方いりまして、何に紙上
の彩を飾りました。紅霧の立つ四畳半と
漢々たる平野を立つて一茅亭輝然と聳
御覧なさい、一往の豪気なる楊つて
迚も無元ふうでしたこと

元禄時代の音楽家梅若太郎の
ことを云ふ人情秘密の一例である

工の字

加藤子爵家の元人、何うも私は子の孫だ
夫婦の鍵と言つたの、子孫のやうな
手とも言つてもよいぬ、私の家が佛であるもの、
と云ふ事を考へてゐる中、私し、川と云ふ字
の事をよいとが、肉のを寝おが悪くて
毎も横顔を眺めては目を見しては人をと
Hとつの字の先をそ、侍と悪口ゐて、
書く人物が使い、工の字さ

東京博覧会

孔邦の出版物を書まる山人の不幸を左の小曼
を次に紹介する

十七校

沼文の推敲改竄の私いてを文邦を良
工苦心の例が許多有るが西洋を餘を次
聴しのを見文けぬ、改竄も人は文章
の力を考さめることを思つ考、そ
私でるいと見えを改を改の作を凝
いのがある、佛蘭西のバルザック此人を
考る不行跡の大胆を用みて、此人天
地を考く取つて、強ど此の真中から書

出す、而して其の後ろに加はるべき
の火隊化ひ、是を本文に線を引張つて
は数々深刻なる癖がありつゝとして、
然を穢い原稿あつたりと思へるが
是うなる印刷の画のあるから、活
版屋さん勉いとして、或る人は Pourette と題
する経営の桟西智を立てゝ校舎の
設立を計画する処、九校で十校
で校するを、その氣の強さを者
つて見ると終る十七校を主張した如き本人
は在る在れに印刷面もぬい概ひあつた、是

東京原製

とて代を取る仕事であるから氣長を
にあるが、迷惑をしたのは版元、右の
経営を責揚げた結動をしたのは何
と此の十七校のお蔭で四るつて日許の
遂ぶ出てきつたと謂へ、看絶快絶、作家
なる者を此の十七校の熱誠無こうなる
印刷不なる者を此の十七校の所例を見る
深切なこうなる、版元なる者は此の
十七校の損失を厭、義とせざる勤年をそう
へうなるかの失の後者となる者を此の熱
誠と深切と勤年とを刷する奴を見た

可かるべしとうけたまはりそうらひ、
殊勝なるものかな
殊来のアテコスリぬかせ

○我邦の葬礼と出す山車と本来我邦
国々の風俗出でしこと
俗ひしこと
[illegible]
しとする事[illegible]うまれの話なるもの
西班牙もと我邦の山車と[illegible]同じき
[illegible]礼[illegible]を用ゐるの[illegible]

東京図書館蔵

[illegible]其の高[illegible]を[illegible]
の行装も六の酷似し且つこの葬礼を行ふ時
[illegible]六月[illegible]其の季節[illegible]我邦
[illegible]と似[illegible]と[illegible]
西班牙国のシルヴィアを主[illegible]行ふ、この地の
物[illegible]も[illegible]野多の[illegible]人
[illegible]と集まると[illegible]
[illegible]年[illegible]と結[illegible]
[illegible]交[illegible]
[illegible]風俗[illegible]
一致[illegible]思ひうれし[illegible]
[illegible]我邦の風を[illegible]

[illegible]ば西人の傳習するも我邦之れを模して製れの類なしの感四せしめ考究の次又仕す
と云ふ

○西洋前の産物の維持負債で大審院判事
中山温を法学教授紀楽と云ふ名目のもと法外
八拾[illegible]円もしくは決定して紛失日[illegible]
二ヶ年間[illegible]円ひあるが山を之の拐の
詐欺で法廷訴訴する話判のよい男ひあるとの文
を早くくらと北の拐ひあるかを
名を決することとなつたのを、例の大審院事件

（自誤判一件を云ふ）異なりかあると謂へるを得
ないが、北の件を訴判事伊藤侯に始め
め元賀庵氏等の終に不審の辞表を出
すことしたるの[illegible]
を名ともなく内閣[illegible]山を表と辞表
を出したのでは[illegible]
をもつて[illegible]山を[illegible]
[illegible]この別[illegible]関係のないもの[illegible]
[illegible]を辞して[illegible]
[illegible]
辞表を出した北の儀杖を吟つて伊藤氏

従て私ハ小山ヲ傭ひ私事ニ小山を然もいたると云
小出は小山か小山の辞表を出したのを思ひ出て勿論
小山一個の考で出したにて早稲田大学の方も除
進んで辞するのである
○学校からも諸君を洋行せしむるつもり今一ヶ所
例を内部に為に起したのに波多野精一を抜擢
研究の為め獨乙へ遊学せしめたることに極めたれ
一番ひあるは実を云へは一先づ藤井健治郎の方を洋行
せしめるつもりであったけれ共なかなか行抜らしもおしきあるので
と云ふのを藤井を先にし波多野をしてもするつもり擢く
東京にて波多野を留めて藤井の助教を来れ従ふ

前後の関係もあるし又今藤井自身の方にも暗に
ら内心洋行を期して居り又遊学を希望して
て居たのでもあらう私は京都大学へ波多野を転
りて抜つてこれを剣附するより外はないとも
波多野を早稲田から除して洋行させて後に代をも
持つ所の学者にするの考を
の内藤をこえて洋行させたのである藤井をこえ
説くとは大に学校の為め悪を出したその措をやめる
とたひ出す研究者は千分の一乃至に決つてる
うら。家が仰つてもいうものも御尤に思ふと云ふ
と私もいふとまた云ふ様子に返事をした一時

[illegible]

○或る高等家の自家の経験を話して云ふ

つまり女学校の校長をもまの人の如き事

第一の校長をとうとうも生徒の母が云ふ

のでもなくもつて母はけんと云ふと、生まれた家庭

養治や等閑にもの現ひもあひた

[illegible]の高等家の立場一体の教育のもの

ひもつが立場を[illegible]と思

ふ

○人間の動物的の身体を傷を加へると自う

ら途会えの働きがはじめ切口の周囲の肉が

巻きあがつて遂に癒着との為に用後する、

[illegible]この自動作を動物の特を地分手術

う取のもの下等動物を看るもの同後

[illegible]のもある又植物でのの内のもの梨や柳柳

の類の口を切り[illegible]切るとの生ずる其の代りの出

て来る、[illegible]年の此枝の根本を[illegible]

其の所[illegible]を[illegible]を[illegible]

り挿うこと[illegible]て[illegible]、柳や[illegible]柳も[illegible]此の

類である、扱もナゼ傷をつけると、[illegible]を接合

るとしい新芽や枝が出て来るのと云

る全体體の内部を警養動物のうるおひ
さめるのみぶ、傷ひもつこうるいと、此の警養
動物が出ヒヤバん核をうるのひある、即ち
傷をつけるのうんる核をもつくるのと、植物
二つ有る此の傷をつけるのを刺激子と共
へると云て云へ、植物の體をそして有る原動
質をうるうるを此の刺激子のうんを高ぶの動
らきをうるのひあるうる、而る植物をのみを
枝を一本切ると其代りに三本も五本も出
ると云ふ枝を結果をうるのひある
傷を高ぶの刺激心動をうる実例とも

東京博覧会

ここに天狗の巣の出来る所以を挙げん、天狗
の巣と云ふを樹の高い所に枝が
等ひも立て此枝をコンモリ茂て見える
巣の様に見える而して俗に天狗の巣と云
ふれこうついてるるが、これるるを植物学者の
説をるるる刺激作用もるる唐の夷
化ひあるるる即ち或る菌類を来て
枝の一部に寄生して其部を刺激するる
其のみを為部の発生が盛るるるる
るるを枝多の枝を出て来るひあるるる
るるる天狗の巣を枝のと斯く巣を

けんぢゃ花を着うえそうに、そこらのを菌類
の中の寄生し植物の
の女の寄生植の組織
刺毒性白が枝の毒を図る十分の作用
を抜えさせて菌類が自分の養料を
ようと云ふのである、畜育作用の事
みそこに生活作用を強く花をつかう
いうあることを知る文此の毒を出した枝の下の
組織を顕微鏡で観ると細胞の中に菌
糸がえそうに、此の小さい菌糸の作用
の形に若しい事を起さることを考へて
そこを知る女の刺毒の強いかを知ること

東京博覚製

が出来る、而して此の刺毒は菌類、ここ分泌する
物質の物質を起こらしいと植物学者
云ふて
山茶、茶掛、茶掛、とかもこと時花が大き
こぶ、うまこと、えんを昆虫が粘質の物質
を出して植物の細胞又組織を刺毒する
結果作用を用ひる作用
こうそこの植物の毒を刺し中へ卵を生む
其昆虫が毒を起つた結果、其の寄生さえた毒を
刺毒作用をもつて其部分の細胞が活潑

[illegible]新しい組織が出来て卵の這入の
[illegible]る部分をスッカリ取り去いて保護する
ことになる、さうして又蟻仔を若干の苔蘚
組織が其内部に出来あるを多量の養分を貯へ
ることになる、而してこの時蟻のコブを俗に
蟲癭と云ひます

○北亜米利加のフロリダ地方の[illegible]
蠅捕草　一名蠅地獄　を今ひ
どこの暖かなる地方に栽培されて珍ら
しくもないが、三好学の「植物の感覚」を読
む者へつに同じ様な植物があるとのを

外国でも若しうまく栽培されたら
又出しにくくなる十数年前、牧野富
太郎の伊豆田村の天城の中で採取したのが
はじまりとなる、此草は水面に
浮び沈んで居て細長い葉を沢山に附い
て、そうして葉の内面を中凹で丁度
貝を開いたやうな形をして此の葉の
内側には多の毛が生えて、そんな風
なので、葉の両側が互に合して閉じて仕舞ふ
そんなあの小さい動物が迷い来て

此の系の中へ定義を与へる事

○植物の動元はどうして起るか

あるいは植物学者は肥料も骨髄も多くは人間と感覚の方法が異なるとの説を信じ、偶しも植元するを事実とし、そこに二つの方法いろいろ異ふしも酒べて見れば、まだ元分の説明をつうぬかず、実地下等動物のうちに射作用を有するものあるうと云ふことである

勿論元射作用のあるを断じたのを表像ひ云い植物の体の組織を解剖して見れば

東京博覧会

ある、一体植物の組織をいうと動物と比べて見ると多の細胞の如きものから成り立つて居ることがある此のかさい実を即ち細胞といふ所の所謂千六百六十年代を云ふ所を二百四十年前の英国の学者ロベルト、フック氏の如きもの見て此を、此の細胞を見るとして人類も植物の体も動物を問はず細胞を基本とする

植物細胞を生活とするとして二つの部分に出来て居る外部を細胞膜と云

一枚の皮うすくして又内部に原形質と名付けてある柔い物質のある、此原形質と言葉は出流してそこに新鮮び其の体の形を等しくして八卦のように入つたり、今日の学問の発達でハ卦まで行くようなこと、ちょうど植物学者が外来の刺戟を感ずるこゝを称して此の流相、即ち此の原形質が往々の変動を起したり抜々の生起的現象をあらはすこと、ちょうどこゝを称して刺戟を感ずるこゝを称して刺戟を伝ふの印象を伝へ

東京博覧会

ようとこゝを従来この学者の研究を抜抜の細胞の中に存ずる原形質と細胞膜を間に存ずる抜々細い孔うを伝の細胞の原形質なる終して存ず、即ち此孔を隣りあつて存ずる細胞膜うまく伝のこゝを通りて一方の細胞の原形質うと細い孔の抜々をつて伝つて存ず、個抜々連絡のあるこゝを自ら刺戟う傳達こゝを知ること勿論傳達の方法を外に存ずる則ち細胞膜の震動と

伝つたゆ傳へられあるうし又或る時代に細胞の
中に多数の出芽の生ずるの原動力に依て刺毒を
作る時代もあるべし
更に一歩を進めて刺毒を出しる部分の構
造に関し色素の有無の研究した結果を少え
て次に植物体の運動を起す時代に出お
る能力を書つて見る細胞又は組織のあること
を知る例へば含羞草にてもこれを太い
茎柄の出て居る基の部の毛のある
所中でも特に太く細い毛が能力を有
つて居ること、これを解剖を加へて茎柄の運

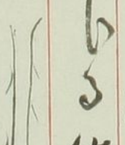
動を起す、法を共に細い毛う刺毒を含け
ゆめて、これを共の毛の基の方にある能力
を有する組織（傳達）するものある部位組織
び調べて見ると共毛の基の方に原形質
を多く含んでいる特別の形の細胞群が
ある、これを今毛の解剖を毛う屈曲するとき
う基の方にある細胞群を押し附て押
し附けられた細胞群ハ膨れて刺毒を出
ト云、これを立ちる運動を起すことなる

○

又植物の接觸を受けつゝ蔦蔓の巻

鬚、胡瓜の生ずる鬚、その巻鬚を拔いて
落ちて跡微隆起ひびくと巻鬚の外面
を被ふる表皮の細胞膜の内部にある
多くの小さい穴のやうなものがあり
その穴の出起から来たる、此穴の外部より
出る細い糸を膜が刺戟する結果
下に是を生ずる人體の皮膚にある感覚
器と同じやうなものも感覚器の内部に
物質の末端が来たる接觸刺戟を
解釈を成すことなるべし

地球の引力のごとき刺戟を受し根の下
の方へ屈曲するその受感器をのべく
出ひ、出来の研究を成しる根の内部に
物質の引力の作用を成しる仕掛のある
とこゝを見る即ち根冠の細
照中に沢山の澱粉質のあることを見る
是れは根を逆さまにしたとき、指を入れて
見ると、直ぐ自分の重さで細胞の下の方へ
降りて来る、其時に柔い原形質を押し
附けて、原形質の感覚を起さも、其結果
として此の運動の起ることを見て



たまがくめしく神変を待きまうしたまを
変とも変化を雖い扶ひあり
○幸田露伴氏男爵男と
自分の経歴を潔然答ぶ書けめと自覚して
こゝ此ものを出すもの潔然なる説を読むに
ものと云ふ此のごろ文藝界の珍聞
なる「法華の信者」を称する法華の信者
のもあり、こんも染んうの貴けの義の作と
云んは云うもう雨あるい、学へてする吸義
を従す扶ものナ料理をもへてるう、
吟ふ法華を罵治の嘲しるのと云う

其の表二つの料理もいづれも出家のあ
つて而も平凡ひとの家ぶ流れる露伴
氏、染んの味味のあり方面ひあることを、こ
ものを作るも知るもの、多くの中一のある事
なる料理を列記して見ると左のもの
なる

飲膳正要　易牙遺意　の饌集
饌史　饌遺意　飲食須知
えん寿書を列載して　例えば
その義をもつて北京の書物を海
猟白ことをえん

珍膳会献立

一 猩々の唇

一 高麗の卵

生き氏き秋を出づ 高麗を子知卵

八島のいりこ」もいひて「臓腑」なり

一 エスカルゴ

毛虫の亀人が食ふ料理 蝸牛の大きさ

ふのを「バタ」で食ふのに

一 スポール

朝鮮の酒 酸味ありさうなもの

一 伊盛三

大根の葉を炮烙で炭にして粉にしたものを

塩水で溶いて四分の三、抽出に若干

八五六時分毎年作業所で所

配つたもの

一 鶉うるか

美濃の恵那郡の鶉の腸の

塩うる

一 抱竿美

えんぜ百貫の抱竿美と名付け唐の

尉遲恭抱の重楚を出して、元

つた料理

鍋の中に花道の根菖

、竹（竹の蓮根）を薄く切り、
一夜の蓮根を五六切にし、
を放つて、湯を沸騰せしめ、
熱を通じたる蓮根の形上
のしく上へ出てたるゝ、
膳部をつくるに蝦養を
を抱きそうゝ熟、
ナイフにて切つて食べ
蝦養

一蜜

朝野会載へ出づ　家のうめもの生え
ゝ、まれ碗へ動けたい奴の一蜜をも
まも、そんを生ひたらめも

東京博文堂製

以下全て
白紙

東京都立中央図書館

明治三十七年一月
下浣起筆

春城山人